

# 「論争のすすめ」を讀む

昭和三十六年「中央公論」三月號

はじめに

恒存の年譜によると、昭和二十九年十月、「平和論の進め方について疑問」を書き、「中央公論」十二月號に發表。論争に捲きこまれる。とある。昭和三十五年七月、新潮「九月號の爲に安保條約反対論」批判「常識」に還れ」を書き、二たび政治論争に卷込まれる。とある。國語問題で、金田一京助との論争があり、羽仁五郎とも論争をしてゐる。「論争屋」と評されたこともあつた様だ。その恒存が、「論争のすすめ」を書いたのは、何故だろう。論争の経験を通し、あるものは反論を予期して書いた論文に対する無反応の経験を通し、日本の論壇に、実りある論争がなされてゐない、實状を明らかにし、その理由を分析せざるを得なかったのだ。恒存の日本の大半の社会学者、及び知識階級の学問觀・現實認識に対する批判は、痛烈に極まり無い。そして最終章で、「社会科学は、その名の通り、科学にならねばならぬ。扱う対象は、学者にとつてはより直接的に、まづ言葉下ある。學者もまた言葉を對象とする職業なのだ。」と言ひ、さうに、「事実があるのではなく、言葉があるのだ。真理は、事実にあるのではなく言葉にあるのだ」と言ふ。明治維新以降の近代化の歩みの中で、日本の学問界が、西洋の觀念論を回避し続けてきたがための、弱さだ。この「言葉觀」を理解せしめるくしてゐるのか。江戸時代には、契沖の様な學者も存在し得たのに、西洋学問・文化の誤った受け入れが、文藝面・社会科学面に、偽善や自己欺瞞を生かしたのだ。実りある言論・論争が、日本に論壇にならぬ。實現されるべく、知力を尽くして恒存らしい文章である。

## 各音の要点

一、論争のすゝめ」で槍玉にあげられてゐるものは、大部分の日本の社会科を稱する者である。

社会科学は科である、  
彼等はは学者ではない。

大抵か唯物史観の信奉者である、彼らの  
学内と、その対象とあり、その中の彼等が  
標榜してゐる、社会との関係は内通してゐる。

←  
反駁があるところ、

よろしい、いつも論争しよう  
と眞の意味における、いし証法とは、その論争に  
あることを明かにしない。

二、恒存自身の論壇での経験と述べる。

丸山眞男氏は反駁しなかつた。

←

論争すべき場合に論争を避けるのは、

論理や表現の外に土俵を期待してゐる。

←

日本の学内、学者の弱さ、か如きん表れてゐる。

・二の問題が引出される。

(第一)

日本の学内、ことにジャーナリズムの間に社会科学の  
分野において、論理や表現が、常に第二義的  
なものか、考へられてゐる。

←  
頭が悪くへたに語ったほうが、誠実、学問的で  
あるとさへ考へてゐる

←  
恒存の文章になし、文学的発想とレトリックとを  
指摘し、それか悪口になると思ひこんでゐる無學と  
低能は、大言る社会問題と言ふべき、

後進国特有の

學者の防衛本能

學問の聖化

要内の神秘化

✓の諸現象が存在する

三、  
四、

丸山邦田氏

中野好夫氏

✓反駁・批判

五、

・二つの問題のうちの 第二について

日本の社会學者に見られる 日本の特異性

←  
讀者に責任を感じるより、同業者やその圧力團體に  
責任を感じる

←  
最も近代的事であることと、自他共に認めてゐる  
言論の世間に於いて、このやうな前近代的身分  
關係が維持されてゐる

←  
論争が公正に行はれうるはむかひ

・恒存の論法に對し、學者の「防衛本能」により、一つの固定觀念の形成されてゐる。

小林秀雄氏直伝の「搦手戦法」とするへん式。

學者の生態を異く、文學的、小説的論法としてか受けとれぬところの、むしろ、文學的、小説的社會からむ。

←  
「藝術と素生活」「文學と政治」といふ、文學的発想、  
和小説的発想の、限界に落ち込んでゐる。

・現実拒否の觀念性を採る得たから江戸時代の儒教  
偽善的傾向が見られる

←  
道德としての自律性が弱い

←  
適応と一致との混同が在る

←  
學問や藝術については、表現と反映との混同

日本の子實主義  
日本の唯物論

←  
反動としての

前衛藝術  
考證學的社會科學

政治においては、理想と現実との混同

王道的完壁主義

・唯物論 そのものの矛盾に氣づいてもうへていか

日本の学問は、西洋の觀念論を回避して、  
常に実益のみに目を付けてゐた。

国家有用の實学

学問の自律性は身につかず、その伝統と  
方法とかを除け者にされた孤立の境へ切れず  
ついにマルクス主義といふ名の實学に身賣りを  
するに至つた。

← 倒錯が生じる

- ・ 唯物論でありながら觀念論としての役割を演じる
- ・ 学園の自治といふ外面的問題と学園の自由といふ  
内面的な問題とのすりかへが起こる
- ・ 社会と大衆とを神にしてゐるから、學者と學生とに  
対する尊敬と信頼を要求する
- ・ 署名運動や大衆行動を学園の真理性の保證に  
してゐるから、さういふ政治的参加の正当性の論證を  
学園に期待してゐる
- ・ 事業をそのまゝ価値に昇格せしめ、学園も政治も  
道德にしてしまふから、それか事業だから価値が  
あり、学園も政治そのものか、最初から道德的  
ものかと思つてゐる
- ・ それら一切の主體的矛盾を学園の対象とする試みを  
非科学的・文学的レトリックと名づけ、強いて  
論理と區別してゐる

ハ  
アリストテレスの修辞學によりレトリックと  
ディアレクティクスの定義を説明する

自明の真 ↓ 事物の完全な証明 ↓ 科学的実証

さう考へられる事 ↓ 論敵や聴衆を説得

するために言葉を組立てる方法  
(レトリック)

✓ 蓋然性の  
ロジック

言葉を組立てる方法  
(タリ)  
考へられる事  
(「レトリック」)

九

「レトリック」の欠如によって起る危険

認識論的危険な革命

革命の方が歴史的必然であつたか証明が下さないので  
かかると、革命理論ゆけの、革命を行ふかといふ  
いふ理由ゆけで真とされてしまふ。

現実には、誤った理念をいれても、代弁者が表れるので  
いと待つてゐるの、それかゝるわけは、つゞいて復讐する。

左右両極端に揺れ動いてゐる 日本近代史、  
「レトリック」と「レトリック」を欠いた言論は

暴力もあり、暴力を誘ふもの、その  
力と力との衝突と、目的と目的との衝突とを  
論争と見做し、代償行為に流してゐる。

十

「レトリック」の「抽象の階層」について

・価値判断を伴ふ抽象語は、高次の階層に属してゐて、  
現実、あるいは生の対象との距離が大で、その真偽は  
確かめにくい。

・人間は、抽象の階層を無限もろく越えりうる能力が  
あり、「民主主義」といふ言葉は、機械的条件反射を  
起しやすい一例である。

←

今日の社会科学者に必要することは、対象に即くといふ  
いかにして、機械的な条件反射を命けること

科学的とは、対象を処理する方法の確たる把握といふこと  
そして、社会学者としての対象とは、

より直接的なまづ言葉にある。

事実のあるのはよく、言葉のあるのみ。

真理は、事実にあるのみではなく、言葉にあるのみ。

事実、即ちうとする、誠意と努力とを怠らなければ、  
そのための道具である言葉がいかんやくあるものか  
（しみみ解いてくる）

←  
ことばの使い方を完成する術

←  
対象と言葉と、それを用ゐる自分との距離の  
意識、丁れてゐるか、偽善的正義感とそれと  
意識せずに行ふことはよくない。

←  
日本の社会科学は科学ならねばならぬ

「今日、私達は、根強く感情的に執着してゐる  
大量の「言葉」、即ち「自由、民主主義、解放、  
独立」等の言葉を、抛棄するか、定義しなほす  
か、として、もはや「個人的、道徳的」説明法に  
頼らざることを求められる。」